

富坂キリスト教センター

Tomisaka Christian Center (TCC)

1985.3.15 No.1

〒112 東京都文京区小石川2-9-4 電話(03)812-3852

富坂キリスト教センター形成に向けて

理事長 佐竹

明

今まで

富坂キリスト教センターは、目下形成途上にある。

現在センターのある場所は、ドイツ東亜伝道会の活動の本拠地であった。この団体は今から百年前、自由主義神学を旗印に日本伝道に着手した伝道会で、京都に活動の本拠を置くスイスの場合とちがい、ドイツではこの十数年来、伝道会の教会への統合の動きが顕著となった。ドイツ東亜伝道会も、西南ドイツのいくつかの州教会、そこに中心を持つ他の伝道会と共に、西南ドイツ宣教本部を形成し、それ以来日本でも独自の働きを中止した。

このことと前後して、ドイツ東亜伝道会では日本での活動の地盤を日本側に委ねようという意見が支配的になって来た。具体的にドイツ東亜伝道会が今まで持ち続けて来た宣教の志を今の状況の中で活かすことを目指しながら、日本側で富坂の土地建物の運営をするように、ということがある。この意向を受けて、この問題の意義ある解決を願いながら、一九七六年、関係諸団体の代表が集まり、今の富坂キリスト教セ

ンター理事会が結成された。

いま、そしてこれから

センターは何をするのか。一口に宣教のためといっても、その具体相には種々の可能性がある。事実、理事会内部でも、この点について、意見の一致を見出すことは中々大変であった。しかし、およその方向は固まって来たと思える。多少私自身の願望もまじえながら、以下にそれを記すこととしよう。

ドイツ東亜伝道会は、いわゆる伝道一本槍の宣教会ではなく、神学の営みに大きな関心を持ち、またその土地の文化との接衝を大切にしている団体であった。もちろん「海外」での伝道がその主たる目的であったが、同時に「海外」での体験をドイツ国内での宣教に役立てたいとの姿勢も、そこにはうかがわれた。センターの将来構想をたてるに際しては、ドイツ東亜伝道会が持っていたこのような志向を、われわれの置かれた状況に適した形で活かすことが、最も望ましい道であろう。

センターは最初の人事として、一九八二年、鈴木正三氏を研究主事として迎えたが、それに

は今述べたような願いがこめられていた。同氏は名古屋の堀川伝道所の牧師を長年つとめ、その間西ドイツ・ハイデルベルク大学のH・E・テート教授のもとに留学して、日本におけるボン・ヘッファーの受容についての論文で神学博士の学位を取得した方である。同氏の任用にあたっては、牧師であること、ドイツの教会事情に明るいこと、神学の中でもとくに社会倫理を実践的関心をもって専攻し、研究上の業績のあることが、考慮の対象となった。

現在までのところ、センターの態勢はまだ十分の整備を見ておらず、従って鈴木主事にも実力を発揮して頂くに至っていないが、しかし同氏の計画立案になる働きの一つとして、すでに二年來、約一〇名の熱心な先生方の御協力を得ながら、天皇制の歴史に関する共同研究会が続けられて来たことをあげておきたい。同氏を中心とするセンターの働きはこの他にもいくつか展開されて来ているが、私はとくにこの種のわれわれの置かれた場についての社会的関心に促がされ、支えられた、しかし、それ自体地道で息の長い共同研究を、センターの活動の柱として据えたいと願っている。それは、キリスト教社会倫理を中心とした、しかし狭義の神学の城をこえた、学際的共同研究と呼ぶことができようか。神学の個別の分野の研究は大学の神学部等で行なわれている。センターとしてそれを重複させる必要はない。しかし、狭義の神学の領域をこえた分野との共同研究は、一神学部の枠内では必ずしも十分に行ないえない。他方、実践的観点からするならば、社会が急速な変化

を示し、教会としてもキリスト者個人としてもそこに生じる新しい問題への対応を迫られている現代においては、そのような幅の広い研究に対する要請は決して小さくないはずである。もちろん、これを行なうには多くの方々の御協力をお願いしなければならぬ。その上で、センターとしてそれを中心的課題として進めたいと考えている。

その場合、もちろんセンターとしての基本的視座がなければならぬ。そしてそれは、イエスに従うことを念願とするわれわれの場合には当然のことながら、社会で安定した生活を送っている人々の側ではなく、そこで犠牲を強いられている人々に少しでも近いところに設定されなければならないと思う。

その同じ思いから、われわれとしては国際的なつながりにも大いに意を用いたい。最初に記したセンター設立の経緯から考えて、ドイツの教会との交流、協力を大切にすることは当然であるが、それと並んで、あるいはむしろそれ以上に重要視したいのは、アジアの人々、とくにそこで同じ志をもって活動している方々との交流、協力である。この分野では、たとえばNCCキリスト教アジア資料センターがすでによい働きを始めている。センターとしてはそのような団体との協力を密にし、無用の重複を避けながら、独自の貢献をしたいと思う。その場合も、上に述べたような広義の神学的営みが関心の中心となろう。

そのような方向への第一歩として、今年一月村上理事、鈴木主事、私の三名は、安柄茂教授

の主宰されるソウルの韓国神学研究所を訪ね、「民衆の神学」を中心に、同教授たちの活動を学び、また今後の協力についての話し合いを行なって来た(別項を参照)。今後この研究所との交流はセンターにとつての大切な課題の一つとなるはずであり、また私としてはこのような交流の輪がさらに拡がることを期待している。最初に述べたとおり、センターの活動はまだその緒についたばかりである。多くの方々の御協力を得て、この働きを有意義なものとしたい。

富坂キリスト教センター理事會構成

- | | |
|-----------|-----------------|
| (理事) | (カッコ内選出母体) |
| 佐竹 明 | (理事長 東亜伝道會) |
| 村上 伸 | (書記 東亜伝道會) |
| パウル・シュナイス | (東亜伝道會) |
| 中嶋正昭 | (日本キリスト教団) |
| 藤原位憲 | (日本キリスト教団) |
| 森岡 巖 | (日本キリスト教団) |
| 尾藤俊一 | (上富坂教會) |
| 豊川裕之 | (上富坂教會) |
| 山岡喜久男 | (富坂セミナリーハウス) |
| 布施濤雄 | (會計 富坂セミナリーハウス) |
| 田中 武 | (学生寮) |
| (顧問) | |
| 夕村嗣夫 | (法律顧問) |
| 岩井 要 | (建築顧問) |
| 石橋光朗 | (會計顧問) |
| (主事) | |
| 鈴木正三 | (研究主事) |

富坂キリスト教センターのプログラム構想

研究主事 鈴木正三

富坂キリスト教センターの成り立ちや、その後歩みについては、佐竹理事長にその大すじを書いていただいた。しかし、これらの流れをセンタープログラムにどの様に生かしていくかは、就任後、二年間あまりの試行錯誤の中から作り出していくしかなかった。今、そのアウトラインが見えてきた様に思えるので、次のステップのためにそのプログラム構想を紹介させていただき、みなさまのご理解とご協力を切にお願いしたいと思う。

日本の教会が、第二次世界大戦中、天皇制的軍国主義に福音を持って正しく対抗できなかったという痛みは、戦後教会の歩みを決定的に方向づけた。それは、天皇制なるものを正しく批判する程に福音理解が徹底していなかった、という痛みであった。さらに、特にアジアの隣人と共に歩む程に福音理解が広がりを持っていかなかった、という痛みであった。その中でわたしたちは自分をも失っていったのだ。これらを反省し、とりもどすためには、どうしても同時に今神から問われている課題の中で歩んでいかなければならない。そこで、センタープログラムの第一に取り上げたテーマが、「キリス

ト教と大嘗祭」（歴史研究会、四ページ）であった。天皇制の中でもこれから行われる天皇即位式（大嘗祭）に対していったいキリスト教会はどの様に理解し、対処すべきかを究明する研究会は現在二年目に入っている。さらに、現場の牧師が牧会上の問題を正面から取り上げ、検討しつつ折り、相互に教会し合うグループ形成（相互教会の会、五ページ）も行われている。これら二つのプログラムは、わたしたちがイエス・キリストの教会を日本に形成していくための、「内側への努力」である。そのための「外側への努力」は、アジアの教会のことをまず良く知るためのプログラム（アジア諸教会共同研修会、一二ページ）として設定された。

この外側への努力をさらに神学的に深めたものにしていきたい、という願いから今プログラム化したところがあるのが、韓国にある安炳茂教授の主宰する韓国神学研究所との共同研究プロジェクト（六ページ）である。この共同研究プロジェクトは韓国神学研究所と富坂キリスト教センターが合意書をとりかわし、長期にわたってじっくりと取り組んでいこうとしているものである。

来年度から「アジアの神学研究会」としてセンター側の研究会を発足させたい。そして可能ならば、来年度安教授をお招きし、再来年度から毎年行いう予定の「民衆の神学協議会」の良き準備をしたいと思う。

以上の「内側への努力」と「外側への努力」という方向の異った二つの課題が富坂キリスト教センターのプログラム構想の中心である。これらは、丁度、だ円の二つの焦点のように、全く異った内容でありながら、福音にあたって一つに見なければならぬ相補的なものである。二つの焦点は別々でありながら、おぎない合っている。しかし、実際に補い合った関係でプログラムを展開できるかは、今後の大きな課題である。これら二つの焦点の合流点として、プログラムとしては年一回の神学協議会を持つことにしている。昨春秋に第一回協議会を「平和」をテーマに行ったが（十一ページ）、この会はドイツの神学思想と日本の教会、韓国の神学や台湾教会の思想がはげしくぶつかり合う非常に実りある場となった。この協議会を今後どの様に展開していくのかも大きな課題だが、そのために来年度後半から「平和研究会」を発足させたいと思っている。

これら全てのプログラムを通じて願うことは内容が神学のみにかたよることなく、「学際的研究」として展開されていくことである。そのために、法学や医学等の専門の方々や、教会にさらなる様々なタラントを持った方々のご協力を心からお願いしたいと思う。

「キリスト教と大嘗祭」研究会の歩み

歴史研究会

はじめに

一九八三年三月二十二日に第一回の会合を持った歴史研究会は、その全体テーマを「キリスト教と天皇制」とし、日本の教会が神学的に見落してきた巨大な問題に、じっくりと取り組んでみることにした。その後年三回程度の研究会を積み重ねてきたが、第一期の中心テーマを「キリスト教と大嘗祭」とすることにまとめた。今年度は七月七日と十一月二十九日に研究会を持ったが、ここでは、十一月二十九日に行われた九州大学法学部教授横田耕一氏（『国民主権と天皇制』法律文化社、一九八三共著者）の講演を中心に報告させていただきたい。

研究会メンバー（順不同）

塚田 理 立教大学教授（聖公会）
角田三郎 上大岡教会牧師（日キ教団）
土肥昭夫 同志社大学教授（"）
堀 光男 東洋大学教授（"）
戸村政博 浅草北部教会牧師（"）
望月賢一郎 恵泉女学院短大教授（"）
山崎 鷲夫 東京聖書学院教授（ホーリーネス）
片野真佐子 お茶の水女子大学研究生（日キ）
横田耕一 九州大学教授
鈴木正三 富坂キリスト教センター研究主事
憲法と皇室典範と大嘗祭

昨年十一月二十九日の研究会で、新しくメンバーに加わって下さった横田教授の憲法と皇室典範と大嘗祭についての講演があった。その後メンバーの間で大変興味深い「学際的討論」が行われた。まず横田教授の講演は以下の様なものであった。

明治憲法下では、政治と宗教（神道）の非分離という問題はもたらなかった。また、皇室典範は明治憲法とならぶ最高法規として機能していた。だから天皇の祭儀大権は憲法と同じであると美濃部教授でさえ言っていた。ところが現憲法は政教分離原則がつけられた。そして現皇室典範は、国会が作る法律と規定され明治時代には明治憲法と同格だった皇室典範が憲法の下位に位置する法律となっている。また現皇室典範では、天皇の即位礼、大葬礼のみ規定され、三種の神器等の言葉が消えている。そこで国体論者らは、皇室典範、皇室経済法等に三種神器、大嘗祭、元号等明治天皇制にとって必要不可欠だった要素がなくなると批判していた。しかし天皇の祭事は戦前と同様今もお私事として行われている。たしかに天皇にも信教の自由があるということから言えば、天皇が宗教を持ってはいけない、ということにはならないだろう。しかし、皇居中に宮中三殿がある

ことや、国家公務員である侍従が天皇の宗教行事に使われていることは問題だ。

明治憲法下では、大嘗祭（天皇即位式）は京都において行われてきた。しかし、京都で行われるにせよ、東京の皇居内で行われるにせよ、現憲法においては、大嘗祭を国家行事として行うことは認められない。皇居内に悠紀殿、主基殿をもうけて、様々な宗教行事を行うからである。私事とされても、一般からの資金集めなどして大々的に行うことは事実であるから、大嘗祭の行事は、天皇と国家と神道が再大結合を計る場となることは間違いないだろう。

しかし、大嘗祭もまた津地鎮祭違憲訴訟判決のごとく「文化的・歴史的伝統」とされ、国事化される心配がある。さらに、最高裁判所はアメリカの判例にならう場合があるが、政教分離をきびしくあつかうアメリカ憲法下の最近の判決では、宗教に対して和解の姿勢が出てきているから注意する必要がある。

大体以上のような話であった。

最後に研究テーマである「キリスト教と大嘗祭」を以下の様に項目に分け、各担当者が小論文を書いて一冊の本にまとめることとした。

- 「キリスト教と大嘗祭」
- 一、古代大嘗祭をめぐる起源とその歴史
 - 二、近代天皇制と大嘗祭（アジアから見た天皇制）
 - 三、大嘗祭の法的思想的側面（明治憲法、旧皇室典範、現憲法、現皇室典範）
 - 四、近代史におけるキリスト教と大嘗祭
 - 五、これからの大嘗祭に対するキリスト教の対応。

牧師同志の相互牧会を求めて

相互牧会の会

たましいのやまいへの牧会を中心に

富坂キリスト教センターは一九八三年以来日本キリスト教団関係団体として、日キ教団と特別に深い関係を保ちつつ活動している。それは理事会メンバーに日キ教団から三名の代表者を送っていただいているから、というだけではなく、教会の働きはきわめて具体的でなければならぬと思ふからである。そのためかたよりは、かたよりのあることを知りつつ、現状では自分たちの限界をむしる課題への集中と受け止めようとして始めたグループがある。これが富坂キリスト教センター相互牧会の会である。日本キリスト教団の牧師であつて、一年間毎月一回の例会できわめて具体的な牧会上の問題を検討し合い、共に心から祈り、牧師が他の牧師に対して牧会的な配慮を行う会である。だから一年間は全く出入りないメンバー構成で行っている。ただし、一年間のプログラムが終つたら解散し、次の一年間への新しいメンバーを加えていく、という方法をとっている。この様なプログラムをセンタープログラムの中に加えたい理由はいくつかある。一つはプログラム構想において書いたように、すでに与えられている福音の出来事に「内側からの努力」を通して参与していくためである。二つ目は、この様なセンターは、ともすると講演会、研修会等々に引き回されて、現場の教会の活動から浮き上つてしま

い、気がついてみると初期の目的とは全く違つたことをしている、ということになりかねないから、教会の働きの中でも最も中心的働きの一つである教会活動を直接センターの活動の中に持ち込んでいただくと考えたのである。これまで二年間行つてきた感想は、メンバーが語つて下さつたところをしるせば、「信頼し合える牧師同志の中で、とりとめのないことでも何かと話をしていることが自分にとって必要である。その意味で、牧師研修所のような感じで、リラックスできる」。「精神障害者に対する教会の問題は継続的に取り上げてもらいたい。このように、一教会ではどうにもならない牧会上の問題をセンターで取り上げ、つつこんで担つてもらうにたい。」といったことであつた。

たしかに一年目の活動は、ほとんど精神障害者に対する牧会上の問題に集中された。もちろん始めから一年間のプログラムを決定してこなしていく会ではないから、行きあたりばつたりこの面もなくはないが、意図せずに全体の流れがこの問題に集中していったことは、現代の牧会上の問題がどこにあるかを暗示して興味深い。

一九八四年度のメンバー（順不同）

須賀誠二（日キ教団東京愛隣教会）

松山与志雄（大島シオン伝道所）

今駒泰成（豊島岡教会）

山本将信（西片町教会）

藤原位憲（果嶋ときわ教会）

横山秀紀（要町教会）

法元聖親（王子教会）

野毛一起（北千住教会）

南 吉衛（玉川平安教会）

河村 博（蒲田新生教会）

愛沢豊重（阿佐谷東教会）

池田 伯（信濃町教会）

鈴木正三（富坂キリスト教センター）

今年度前半は、ひとつの教会が直面した教会構成上の問題とその本質、及びそこに置かれた牧師の牧会上の問題を徹底的に語り合い、そのためにみなで本心に心を一つにして祈つた。夏は伊東で二泊三日の合宿を行い、食事、そうじ等を共同で分担し、海で魚を釣つてはそれをおかずにするような実に楽しい共同生活をした。秋は十月に行つた「第二回アジア諸教会相互理解のための研修会」でリマ式文によるエキキュメニカル聖餐式的内容的な準備を行つた。そのために九月の例会では、昨年十二月までセンターの協力牧師として働いて下さつたバインケ牧師にリマ式文の講演をしていただいた。十二月はクリスマス後に、ぐるろう様でしたということ、メンバーご夫妻に集つていただき、持ち寄りの食事で談笑した。一、二月は「臨終の方への牧会」などをテーマに例会を持つた。三月は二十六日に最終例会を行う予定だが、昨年同様精神分裂症病理研究会メンバーで都立在原病院精神科医長茂田優先生に来ていただいて、教会が担う精神障害者に対する牧会上の問題と、共に生きる際の問題につき語り合うことになつて

民衆の神学への旅

日韓共同プロジェクト報告

プロジェクト企画までの経過

富坂キリスト教センターが一九七六年に設立されて以来、センターの方向は徐々に決定されていった。それはたとえば一九七九年に出された佐竹理事長の「富坂キリスト教センター将来計画私案」の中にも、国際的な視野に立つ活動として「韓国ソウルの安教授の研究所との提携」ということがうたわれていたことから分かる。その後一九八二年十二月の理事会に「富坂キリスト教センターにおけるエキシメニカルな活動」の概要が出され、センターがその活動の中心の一つにアジア諸教会との神学研究交流を積極的に行っていくことが承認された。そして具体的には一九八四年十月の理事会で、今後の交流問題につき近くセンター代表団が韓国神学研究所を訪問することが決定された。

韓国神学研究所について

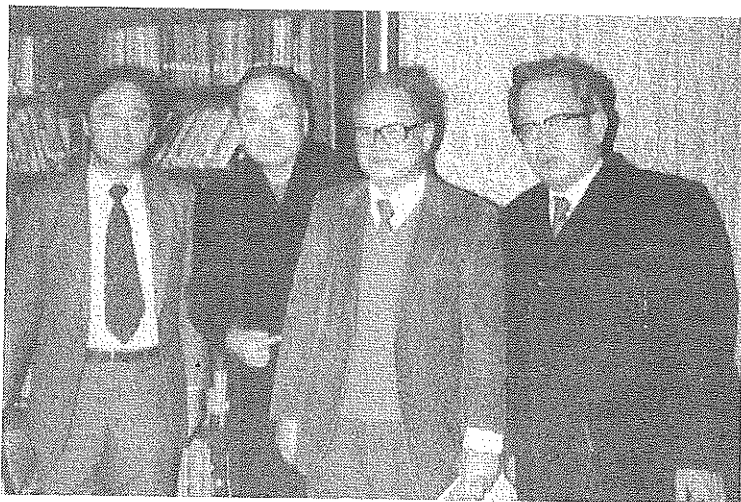
この決定に基づき、一九八五年一月三日から六日までの四日間、佐竹明理事長、村上伸理事鈴木本研究主事が韓国ソウルにある韓国神学研究所を訪問した。第一日の晩、安炳茂教授から韓国神学研究所の成り立ちが次の様に紹介された。韓国神学研究所構想は一九五八年教授がドイツ・マインツで韓独キリスト教関係について

講演した時表明された。一九七二年に韓国に理事会が作られ、ドイツ教会の支援によって現在の二階建研究棟が建設された。初期の仕事はドイツ神学書の翻訳出版、神学雑誌「神学思想」出版などだった。現在まで翻訳書三五冊「神学思想」七四号、毎号三千部を出している。これからは注解書シリーズ出版を計画、今年中に四階建研究所新築にとりかかる。十二名の有給職員が働いているが、人件費が全体の三十％を越えない様に努力している。

「民衆の神学」の産室はこの韓国神学研究所だった。民衆の神学では、理論だけでなく、あくまで労働者の声を聞かなければならないという。現場の声を聞くことが神学研究作業の一つであるから、毎週この研究所では現場の声を聞く会を行っている。たとえばデモ学生が警察に連行されて、辱しめを受けた。これらの出来事はこれまでではかくされてきた。しかし、このことがこの会で語られ、みなの問題とされた。タクシー運転手が労働問題に抗議して自殺した。このことも取り上げられた。神学がこれらの問題に鋭敏になれば、神学は変わっていくだろう。また聖書の読み方も違ってくるだろう。救いは

かならず貧しい者からやってくるのだ。その人々から自分が如何に救われるかということを経験するのだ。韓国の教会員階層は社会的には下だ。だからバルトを何十年教えても何の影響も与えなかったというのが実感だった。今は牧師は神学にとらわれていない。韓国の牧師は神学的には不毛地だったが、それがよかった。民衆の神学が新しい道を開いていっているからだ。日本では牧師がいわゆる神学にとらわれすぎてゐる。韓国の牧師には、一冊の神学書を読むよりも、一つの物語を作れ、と言っている。

以上の様な韓国神学研究所の紹介の後、しばらく話し合いが行われた。村上理事は、民衆の神学的作業と研究所のドイツ語神学書翻訳作業とのつながりは何かと問うた。これに対し、安教授は、西欧神学の必要性は、聖書注解の際文法とかその他の実用的なものはヨーロッパ・アジアを問わないからである。しかし、その聖書の中に書かれている意味内容は、ヨーロッパ神学から来るものではなく、民衆から来るのだと答えた。佐竹理事長は、続けて、シンガポールに行ってみてびっくりしたが、第一国語は八十％の人々が英語だった。たしかに、脱亜入欧は間違っていたが、しかしある結果は生んでいる。日本には、自分たちはアジア特有の考え方をしていると考えている民衆はいないだろう。これが韓国と日本の違いではないだろうか。日本では教会の言葉と民衆の言葉の差、インテリとその他の人々の差は大きくないと問うた。これに対し安教授は次の様に反論した。現在フェミニストの神学と民衆の神学とが共闘し始めている。



鈴木主事，村上理事，安教授，佐竹理事長

女性の問題をとりあつかうとインテリ女性であっても、やはり本当に憤慨する。だから差がないというのは本当ではないだろう。私は獄中で民衆の言葉に出合った。そこで交わされてきたくない言葉は生命の根源から出てくる叫びなのだ。この言葉を聞かなければと思った。その

時自分は同じ国に生きていながら、異邦人だっ
たと思ったのだ。そして獄中にいる人々がなん
とあたたかな心を持っているかということも知
った。泥棒などに対しても考え方が変わってしま
った。イエスの奇跡物語を見ると、そのいやし
の仕方は一人一人の手をとったり、さすったり
して本当に民衆的だ。この視点からイエスの奇
跡物語が今になって新しい意味をおびてきた。
以上のような話し合いが第一日の内容であった
ソウルの正月は寒くて凍てついていたが、わた
したちは内に燃えるものを感じつつ、宿舎であ
るYMCAへの帰途について。

韓国の民衆の神学 — 徐洸善教授の話

二日目午前中は、まず民衆の神学について、
徐洸善教授から説明を受けた。

韓国には福音派の教会も多い。ある教会では
日曜礼拝に一回につき一万二千名もの参加があ
り、これを一日七回も行っている。そこで牧師
は異言を語るのだが、病人などはカタルシス(浄
化状態)に至り、病氣治療にもなっている。
本道の民衆の中にこの様な治癒プロセスがある。
私はこの様な方法に批判的だったが、今は肯定
的である。そこに民衆のハン(恨)があらわれ
ている。イエスはハン(恨)ではなかったのか。
無病息災、家内安全、商売繁盛が福音派の方針
ではあるが、その背景にはハンがある。日本に
は八百万の神々という表現があるが、それはハン
がその様に表現されているのではないのだから
うか。民衆の神学の一つの課題はこの様な韓国
のシャーマニズムやシャーマニズム的キリスト
教の中にイエスを発見していくことである。民

衆の神学のもう一つの流れは、韓国における政
治・経済的問題に対する独自の立場である。民
衆の神学は、韓国ではマルキシズムの話を
するだけで問題にされるような緊迫した国際政治
の中に置かれてはいるが、マルキシズムをもあつ
かっている。しかし問題は非常に複雑である。
私の父も牧師だったが、北の共産党に捕えられ
て銃殺された。そのため私自身、経験的反共で
あって、その気持は非常に強い。しかし資本主
義に組するわけではない。たとえば、日本と韓
国の立場を民衆の神学的視点に立って見ると、
韓国自体が民衆の立場にあり、その意味で日本
自体が韓国に対して反民衆的である。イエス伝
承は民衆のウワサであったという安教授の説が
あるが、実際民衆が信用するのは流言蜚語であ
るのは古今東西変わらない。言論の自由がない
時真実を語るのはウワサである。私は投獄され
大学から追放されたが、再び出獄し、大学にも
どって来た時、そのことがどの新聞に出たわけ
でもないのに、ウワサでみんなが集ってきてく
れ、大歓迎を受けた。この様に民衆の神学の視
点は下から事実に基づいて設定され、民衆的物
語を通して表現される。かつてドイツの神学者
モルトマンとの対話の中で、イエスは民衆と共
に居たが、民衆ではなかったと言われた。しか
し民衆の神学は、イエスは民衆である、と主張
する。

以上の様な徐教授の話の後で、またしばらく
話し合いが行われた。村上理事は韓国のシャ
ーマニズムについて問うた。韓国のシャーマニ
ズムには建物も祭司も教典もない。しかし、韓国

の民衆の中に深く根づいているので、キリスト教会の歌の歌い方などにも反映しているのではないかと思う。シャーマニズムの神々には善悪はない。だからどういふ風にこれらの神々を良くするかはわれわれの信仰にかかっている。佐竹理事長は次の様に問うた。イスラエルの宗教は多神教の中で唯一神教を守ってきた。日本でも同じ問題がある。韓国ではどうか。徐教授は、シャーマニズムの中でもハナム(神)が天の神を現わしている。そこでキリスト教が入ってきた時、韓国の民衆はキリスト教の神を容易に受け入れることができた。これまではシャーマニズムとイスラエルの宗教は対立的に考えられてきた。しかし、これは神学的に研究し直す必要を感じている、と答えた。

韓国の民衆の神学と日本の教会の課題についての鈴木研究主事の話

徐教授の話の後、鈴木研究主事が韓国の民衆の神学とそれに対応する日本の教会の課題について、主に後者に力点を置いて話を展開した。(『韓国の民衆の神学と日本の教会の課題』の全文は『福音と世界』一九八五年四月号に掲載されています)

一、民衆の神学と日本の教会の接点

日本の教会と神学にとって、民衆の神学との出会いは、ヨーロッパやアメリカの神学との出会いは本質的に異っており、また必然的だった。それは民衆の神学自体韓国の民衆の苦難史から生れてきたものであり、民衆の苦難を韓国に強いたのは、歴史的には日本だったからである。さらに、日本キリスト教団は一九六七年に

第二次世界大戦中の戦争責任の告白を公けにした。それによって、それまでの隣人不在の教会と神学の歩みを大きく変えた。その様な歩みが民衆の神学に出合うことは必然であった。さらに、第三に日本の神学もまた長い間西欧の神学をのり越えて、土着の神学と教会の歩みを作り出そうと模索してきた。しかし、そこから出てきたものは、日本的キリスト教や折中のキリスト教であった。この問題で民衆の神学は、日本の教会が土着のキリスト教になりうる新しい視点を与えてくれるのではないかという大きな期待がある。

二、民衆の神学の理解

民衆の神学は一九六〇年代の始め、都市産業伝道グループが労働者伝道を始めたとから形成されていった。労働者を伝道の対象にするのではなく、伝道者が労働者になって現場に入っていたことにより、始めて「イエス・キリストの身体を労働者自身の中に見出す」ことができるようになった。しかし、一九六五年の日韓条約から始った日韓の「新植民地体制」により様々な人権抑圧問題が起り、キリスト者の苦難もまた深まった。しかし、一九七〇年に入ってから神学者たちが次々にこれらの運動に参与していった。そして起った出来事に対する神学的反省が行われるようになった。この様にして「民衆の神学」が形成されていったのである。

三、民衆の神学の特徴

民衆の神学の特徴を上げれば、次の五点になると思われる。

(一) 民衆の神学の主題は民衆であり、イエスは

は主体化された民衆である。

(二) 民衆の神学は支配者の言語を問題にするのではなく、ハン(恨)を、つまり罪に定められた事情を問題にする。

(三) 民衆の神学はキリスト教の民衆伝統と韓国の民衆伝統の合流点に成立する。

(四) 民衆の神学は神の言葉の説教を通してというよりも、一つの事件を通して神の御業が行われると主張する。

(五) 民衆の神学は「民衆の言語」を用いて語るのであって、西欧神学がこれまでに行ってきた思弁的、哲学的、神学的言語で語るのではない。

四、民衆の神学の解釈

(一) 韓国の社会・経済史の中に生れた民衆の神学

民衆の神学は一九六〇年代から始った都市産業伝道に端を発しているといわれている。しかし、一九五〇年に公けにされた『苦難の韓国民衆史』感錫憲著の中にすでに民衆の神学の基本的主張は出ていたといえる。また、韓国のキリスト教史そのものが苦難の民衆史の一部であった。一九九二年に小西行長が朝鮮を侵略した際連れ帰った韓国人ドレイが韓国人で始めてカトリックの洗礼を受けたのだったが、皮肉にも侵略者だった行長や家来たちもカトリック教徒だった。日韓キリスト教のこの様な運命的関係は一九四五年まで続いたのではないかと思う。

(二) 民衆の神学が持つ西欧神学批判

民衆の神学には、従来の伝統的神学に対する非常に深い批判が含まれている。それは、これ

までの神学が見ようとしなかった、民衆の中にある光をわれわれに見えるようにしてくれたいということである。それは、民衆の神学がキリスト論的見方よりも、聖靈論的見方をとったことから可能となった。

(三) 民衆の神学は、教会と神学を「言葉」の世界から民衆が働く現場の世界へそれらを解放した。

民衆の神学は単に教会と神学を「言葉の神学」から解放したというだけではなく、「事件の神学」へと導いた。民衆の働く現場において、垂直的な神の恵みが示されるところに神の出来事が起る。これが言語化され、歌われ演じられるところに民衆の神学の作業がある。

五、民衆の神学への問い

それにもかかわらず、民衆の神学へのいくつかの疑問がある。それを次にあげて説明したい。

(一) イエス・キリストの唯一性は民衆の神学にとって障害となるのか。

聖靈論的解釈はイエス・キリストの存在をパウロやその他の人々と同様の存在に相対化したように思われる。たしかにイエスを歴史的人物として相対化する事は大事である。しかし、それ以上に大事なことは、イエスの人格を唯一なるものとして告白することではないか。もし単に相対的イエスのみが主張されると、宗教的人間の自己絶対化の要求や、ある組織が絶対化を要求する時に、それに対抗できなくなるのではないか。そのためにバルメン宣言では、ヒットラーその他の機関の偶像化に反対して、次の様に宣言された。「聖書においてわれわれに証し

されているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一のみ言葉である。教会がその宣教の源として、神のこの唯一のみ言葉のほかに、またそれと並んで、更に他の出来事や力現象や真理を、神の啓示として承認しようと承認しなければならぬという誤った教えを、われわれは退ける。」

(二) 民衆には、大衆と個人という二種類の様式があるのではないか。

イエスはたしかに、支配者に対しては常に一様に民衆と共にあった。しかし、民衆自体に対しては、大衆と、その大衆の中から呼び出された個人としての民衆と二様にかかわったように思われる。イエスを十字架にかけることに賛成して叫んだのも民衆であった。しかし、個人はこの様な大衆から召し出されて、責任を担うようにされた民衆であるとはできないだろうか。

(三) パウロは民衆の神学の中でどの様な役を演じているのか。

パウロは伝統的教会では常に主役の一人であった。しかし、民衆の神学ではもはや主役を演じてはいない。パウロはたしかに民衆ではなかった。しかし、イエスに出合ったことにより、民衆の一人となつて、イエス・キリストの故に多くの苦難を受けなければならなかった。パウロとイエスの違いは、パウロはイエスを通してしか神に祈ることはできなかったが、イエスは直接に神と共にあったということである。神からパウロへの直接性ではなく、パウロから神

への間接性は民衆の神学にとつても重要であると思われる。なぜなら、その様な間接性の故に民衆はその思ったところに従つて聖書を様々に書くことができたのであるから。

(四) 神の律法は民衆の神学の中でどの様な役を演じているのであろうか。

律法は旧約においては、出エジプトのごとく民衆がドレイ状態から解放される時に非常に大きな役割をはたした。しかし、民衆の神学では律法はあまり注目されていない様に思う。

六 民衆の神学に対する日本の教会の課題

(一) 日本の教会の第一の課題は戦責路線をつらぬき通すことである。

(二) 第二の課題は日本の中に、民衆の神学と同様の歩みがあったかどうか発掘することである。

たとえば、明治時代足尾鉾毒事件の田中正造の歩み、山谷伝道を行った伊藤之雄牧師の試みなどは検討に値するのではないか。

(三) 反天皇制的教会形成

これら先達の歩みに見られるように、日本の民衆を韓国の民衆とすぐに同定することはゆるされない。それは日本の民衆は天皇制にとり込まれた大衆でもあるからだ。そこで、その大衆のさらに下に位置する社会層に視点を置き、教会内にもある天皇制的機構を克服していくことが求められている。

(四) アジアの教会と共に歩む教会形成

この第四の課題は第三の課題と相補的關係にある。一九六七年までの特に日キ教団教会は隣人無き教会であった。これを克服するためには

まず隣人教会を良く知り、アジア教会と共に歩むプログラム作りをしていかなければならない。しかし、われわれが韓国の教会のごとく「彼のはずかしめを身に負」(ヘブル十三・十三)うことが許されるかどうかは、われわれの行動にかかっている。

以上が鈴木主事の話であった。これに対し、特に四つの問いに対して議論が展開され、昼食の場にまで持ちこまれた。

徐教授、日本においては天皇制の問題がいまだに大きいようだが、韓国においては、第二次世界大戦後王制復古を主張して、韓国皇室を復興しようとする人は誰もいなかった。この点が韓国と日本の大きな違いである。

安教授、イエスの民衆性と唯一性はイエスの出来事の中で示されている。しかし、新約学者として、イエスをダビデ大王と比較して、結びつけるようなやり方は断固批判していかなければと思っている。次に大衆と民衆の問題だが、顔のない民衆である大衆がイエスを十字架につけることに加担したことは事実だが、弟子は逆にイエスをケリユグマ化し、福音を教会の中にとじこめた。この流れを批判したのがマルコ伝で女性を中心にした口伝によっていると思う。だから問題は、弟子をどこから見るかだ。

徐教授、民衆の言語的視点から見ると、なぜイエスが殺されたか、とは問わないし、理由も言わない。なぜなら支配者が抑圧するからだ。にもかかわらず、民衆の中ではすでにその理由は了解されていて、生きている。これがケリユグマではないか。民衆の中ではロゴスよりもパ

トスが生きている。

安教授、われわれは十戒を律法とは見ない。貧しい者を保護するためのものと見る。民衆の神学の中には教会論がないとよく言われる。しかし、イエスはオクロス(群衆)に、あれをしてはならない、これをしてはならないなど何とも言わなかった(マルコ伝)。だから私は自分に対してはきびしかったが、他人に対して律法的にかかわるということは全くなかった。民衆の神学は反道徳的などころがある。

佐竹理事長、安氏の自己に対するきびしさと他者への寛容は、古い自分の中から出てきたものではないか。

安教授、いや、状況から出てきたきびしさだった。

佐竹理事長、神の国の到来と民衆の神学の関係が良く分からないが、神の国は来ているということが正しいのではないか。でないと自由が出てこないように思う。

安教授、マルコ伝一・一五の「時は満ちた、神の国は近づいた」という記事は、一四節によって支えられている。この点が今まで全く問題にされてこなかった。「ヨハネが捕えられた後イエスはガリラヤに行き」と書いてあるが、ここに、神の国が来ている、ということが言われているのだ。だから私は神の国が胎動する、という風に表現している。

合意書締結に向けて

四日午後からは富坂キリスト教センターと韓国神学研究所との具体的な共同研究プロジェクトについて話し合いが持たれた。韓国神学研究

所側からは、安教授と今後の具体的なプロジェクト実行委員となる研究所学術部長をしている朴聖煥氏が出席して下さった。共同プロジェクト構想に関しては安教授は終始積極的に具体案を提案して下さった。その結果、アジアの教会の「民衆の神学」研究のためにセンターと研究所が広い視野を持って協力する。そのために年一回アジアから専門家を招いて神学協議会を行う。また研究員の一年以上にわたる長期交流を行い、そのための施設拡充新設を計る、といった基本構想がまとまり、これを合意書にまとめて両理事会の承認を得ることとした。またセンター側からは早速安教授を一九八五年度に日本にお招きしたい旨の要望をお伝えした。今回の韓国への旅が予想以上に実りあるものとなったことを心から感謝したい。(報告者 鈴木)



平和への連帯を目ざして

第1回神学協議会

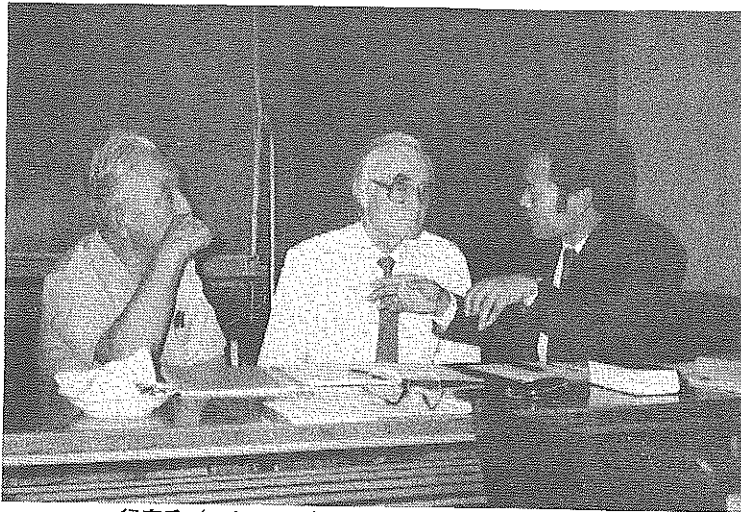
富坂キリスト教センターの第一回神学協議会が一九八四年十月五日「平和への連帯——正義に基づく反核平和のためのエキュメニカルな連帯を目ざして——」と題して行われた。

H・E・テート教授はハイデルベルク大学で長らくキリスト教社会倫理を教えるかたわら、西ドイツ平和運動に対し、理論的実践的かわりをしてこられた方であった。今回テート教授が来日されたのを機会に西ドイツ、日本、韓国、台湾、プロテスタント、カトリック共に平和への連帯の道をさぐるうと計画した研修会だった。各国、各派、各グループから四二名の方々が出席して下さった。

午前中にまず、テート教授の講演「キリスト者非キリスト者共同の課題としての核兵器廃絶」があった。(くわしい内容についてはテート著『平和の神学』新教出版社一九八四と参照下さい。)

まずテート教授は西ドイツの平和運動の歴史を一九八一年に始まる巨大なデモに至るまでに概観した後、この平和運動の中でなぜ「イエスの山上の説教」が集中的に取り上げられてきたかに言及していく。米ソの対立は今やヨーロッパを犠牲にしても自分たちが生き残るといふ核兵器戦略にまで至った。それがバージョンⅡやSS二〇といった中距離核兵器設置の意味である。それを支える思想は、ヒットラーと同じ「死への衝動」であり、自分たちが生き残

るためには他を抹殺してもよいという「権力への衝動」である。それ故、これらと対決するためには、山上の説教にある「愛敵の思想」を持って、両陣営の内側からこれに立ち向わなければならない。それがイエスの歩んだ道であった。午後から夜にかけて、広島府中教会牧師宗藤尚三氏、NCC核問題委員会大島孝一氏、カトリック正義と平和委員会山田経三司祭、台湾教会張清庚牧師、池明観教授等からテート教授の



行宗氏(カトリック)、テート教授、南牧師(日キ教団)

講演を軸に、貴重な発言と対話が行われた。ここではテート教授と池明観教授の間に交わされたヨーロッパ反核理論とアジア人権闘争理論とのまことに生産的な対話を報告しておきたい。

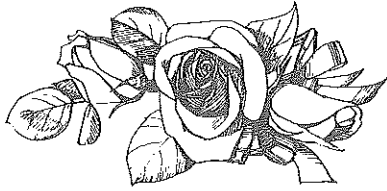
まず池明観教授がテート講演に対して、イエスの山上の説教がヨーロッパ平和運動の中でのみ注目され、アジアの人権闘争の中では全く取り上げられないのは象徴的である。第一世界反核運動は第一世界保護のための運動ではないか。第三世界の人権闘争は核をもたらし第一世界のトータルな拒否を指向していると反論した。

これに対してテート教授は四つの質問で答えた。第一に池先生は韓国にあっては反核平和は二次の問題で、人権問題こそ第一だと言われたが、もし韓国が原爆を持ったらどうするのか。二の次と言っておれるだろうか。さらに池教授は、今や米ソの対立よりも南北の対立の方が大きい、と言われたが、南北対立の根は米ソ対立であり、しかも第三世界に対して米ソが共同して対抗するという構造を見るべきではないか。

第三に、第三世界の革命と言われるが、問題はスターリンの例を引くまでもなく、革命後にどうするかという理論があるかということではないか。第四に、一九六六年以来、民衆の神学などが第一世界の神学に対立して胎動してきた。しかし問題は第一、第三世界の神学が共に相手のどこに友を見出すか、ということではないか。これに対して池教授は次の様に答えた。

第一に、日本では自分では核を持たず、持ち込ませないにおいて、韓国内に米軍の核を持ちこませるといふ核戦略を立てているが、これを

日本の平和運動はどう見ているのか。第二に、革命後の問題は戦いの中で出てくるのであって抽象的に出てくるものではない。最後に、民衆の神学は黒人神学等とは違って対話的である。これに対してさらにテート教授から問いが出された。東ドイツやポーランドではまだ国家の合法的権力があるので、国家への「批判的忠誠」というかわりが可能である。民衆の神学は、この合法的権力を評価するか。平和という言葉は使ってきたが、困窮と暴力と不自由の排除が平和へつながるといふ点をもっと明確にすべきではないか。時間の関係で議論は中断されたが、センターは、これらの内容をさらに将来のプログラムに継続していきたいと計画中である。



第二回 アジア諸教会共同研修会

富坂キリスト教センター第二回アジア諸教会相互理解のための研修会が、一九八四年十月二十日から二泊三日のプログラムで行われた。アジア学院の協力によって第一回からアジア学院の留学生に来ていただいているが、今回は左記パンフレットに紹介させていただいた様に九名もの方々が来て下さった。第一日は夕方に後援団体の日本キリスト教団東京教区北支区国際宣教力委員会のメンバー共々、オリエンテーションの会を行った。翌日曜日は左記パンフレットにある八教会に分散していただいて、礼拝説教をしていただいた。インド、スリランカ、ビルマ、インドネシア、ネパール、それにアフリカのタンザニアからのお客さんも含めて各教会で大変良い説教をして下さった。スリランカ長老教会から来られたスチーブン氏などまだ二十才なので、どんな説教をされるか心配したそうだが、それは全く杞憂に過ぎなかったそう。そこに共通にあったのは苦難にねられた信仰であった。午後は各教会で歓談した後、富坂セミナーハウスに集っていただいて夜まで交わりの時を持った。この時にアドバイザーをやって下さったのがアジア学院副校長の菊地創氏であった。出席者四八名が三つのグループに分れ、親しく語り合った。夕食後は写真にもある様に、各国の歌や踊りが披露され、本当になごやかなひとときを持つことができた。最後に、WCCが苦心をして作ったエキュメニカル聖餐式を全員で守り、無事研修会を終えた。三日目は留学生の方々全員が婦



ネパールの踊りを披露するクリシュナ・グルンさん

人保護施設いずみ寮を訪問した。アジア各地の教会より良い建物を売春婦更生に使用していることに、奇妙な感を持たれた様だった。最後に大泉ベテル教会婦人会の豪華な昼食にみな心から豊かにされて、この会を閉じることができた。

富坂キリスト教センター

第2回アジア諸教会相互理解のための研修会のご案内

富坂キリスト教センターでは、アジア各地の教会と日本の教会の相互理解を深めるために、昨年アジア学院から5名のキリスト者をお迎えし、第1回研修会を行いました。この会から良き交わりが生れ、インドネシア教会からの招きで、近く南支那の青年有志がインドネシアの教会を訪問することになったそうです。そこでセンターでは今年もまた教会間の相互理解のためにアジア学院のご協力を得て、北支那国際宣教協力委員会の後援の下に、第2回研修会を行うことに致しました。今年にはアジア学院から下記9名の方々をお招きし、日曜日は北支那・東支那の教会で説教をしていただいた後、教会の方々と共に富坂キリスト教センターに集っていただき交わりを深め、最後にリマ式文によるエキシブニカル聖餐式を共にしたいと思います。さらに、昨年はアジア学院の方々に全生園を訪問していただきましたが、今年には月曜日に婦人保護施設いずみ寮訪問を計画しています。また今年は話し合いのアドバイザーとして、西那須野にありますアジア学院副校長菊地創氏をお招きしました。菊地氏はアジア各地の教会や国々の事情に非常に詳しい方ですから、実りある話し合いが期待できるものと思います。各支那の牧師、神学生、教会員の方々のご参加を心からお待ち致します。

1984年9月1日

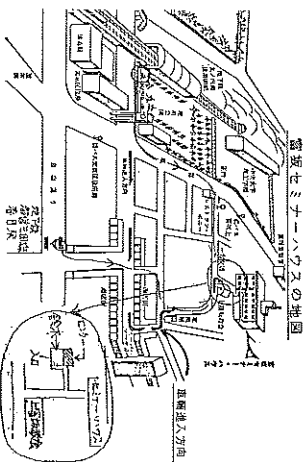
富坂キリスト教センター 理事長 佐竹 明










一記一

日時・場所：1984年10月21日（日曜日）午前各教会にて礼拝、午後3時より富坂セミナーハウス（下記地図）にて午後8時30分まで

全体テーマ：アジア諸教会の相互理解のために
内容：礼拝説教（西片町教会、果嶋ときわ教会、王子教会、深川教会、百人町教会、豊島岡教会、大島シオン伝道所、本所緑星教会にて）各国の宣教活動、教会の働き等について話し合い、聖餐式

アドバイザー：アジア学院副校長 菊地 創氏
参加者：1人 2,000円（夕食代金）
（参加ご希望の方は夕食その他の準備の都合上電話で10月18日までにお申し込み下さい。）



 開発計画部長兼役員 Joseph Mwanza Development Projects Christian Council Tanzania シンセワ・タンザニア Development Projects Christian Council Tanzania (1977)	 (地名) 地区主任 District Superintendent The Methodist Episcopal Life Church India E. B. Mchod P. B. カンパ (1977)	 専攻教師 Teacher Manduque Sambopate Kichabu Gungu マンダクエ・サンボパテ (村議会) (1977)	 農村開発のコーディネーター Rural Development Worker Irian Jaya New Service Center Oservian Kablo オサビア・カブラ (1977)	 研究員 Field Research Assistant Karing Hing カン・ヒン (1977)
 専攻職員・伝道員 Kengjiet Kengjiet Baptist Church インドネシア (1977)	 ソシオカル・ワーカー Social Worker K R I R R R Johnny Yousuphan ヨウソフアム (1977)	 農村開発のコーディネーター Student Theofreysian Church Tyrone Stephen テイロン・スティーブン (1977)	 研究員 Field Research Assistant She Ka Moo シェ・カ・ムー (1977)	1984年9月1日 富坂キリスト教センター 理事長 佐竹 明 主事 鈴木正三 〒112 東京都文京区小石川2-9-4 電話 (03) 812-3852

1984年度

ドイツ語神学書と会話研修コース

ドイツ語神学書と会話研修コースは、この一年間毎週火曜日午後六時半～九時まで三十回行ってきました。今年度は講読を鈴木主事、四月から十二月までドイツ語会話をバインケ牧師が担当しました。しかし事情あって十二月にバインケ牧師が西ドイツに帰国しましたので、一九八五年一月から、東京望みの門の協力宣教師ドリス・グロースさんに会話を担当していただくことにしました。また一九八五年度もグロース宣教師に引き続きお手伝いいただくことになりました。この様な形での仕事を快く引き受けて下さったグロース宣教師及びそれを許可して下さいた東京望みの門にこの場をかりて、心からお礼を申し上げます。今年度は十二名の参加がありました。なかなかきびしく教える若い女性教師のグロース宣教師が来年度もやって下さることを知っています。一九八五年度は十六ページにそのチラシが出ていますように、四月二十五日(木曜日)から行います。是非ご参加下さいませようご案内致します。今年度は初級会話に、『ドイツ語を学ぶ喜び』中級講読にマックス・ガイガー著『ボン・ヘッファー』を選び、中級講読では『ボン・ヘッファー』をついに読み終わりました。コースのやり方は、初級講読、中級会話を同時に始めて一時間、途中コーヒー休みが入り、交代し初級会話、中級講読を一時間となっています。

英語で語るアジア問題の会

英語で語るアジア問題の会は日本キリスト教団東京教区北支区国際宣教協力委員会と共催で一年前から始めたものであります。アジアにかかわるのなら、韓国語か中国語をやるべきかもしれません。けれども、以前、名古屋にあるアジア保健研修所主事の山下政一氏が『福音と世界』に、アジアを理解するためには、アジア英語を話し、理解することが不可欠だと論じていたことがあります。実際アジア諸国で英語が日常生活に使われている国はいくつもあるようです。そこでセンターでは北支区と協力して、アジア問題を英語の文献で学びつつ、会話も勉強できる小さな会を始めたいです。英語の指導は北支区宣教師レーガン牧師です。これまでに、フィリピンの政治状況ホンコンの中国返還とそれに伴う教会の問題、そして現在は韓国の徐洗善教授の『神学、イデオロギー、そして文化』一九八三年英文、を読んでいます。特にその中の「シャーマニズム」——ハンの宗教——は韓国の民衆の神学を側面から学ぶ機会となっています。現在のメンバーは七名ですが、みなさまのご参加を心からお待ちしています。月二回隔週月曜日午前十時から十二時まで、センター集会所で行っています。会費は月千円。会話に關しては「良い子」と「悪い子」しかいませんので、是非、「ふつうの子」が入ってきて下さらないかとみな期待しています。四月からの予定を知りたい方はセンターにご連絡下さい。

ボン・ヘッファー研究会

ボン・ヘッファー研究会は、日本ボン・ヘッファー研究会と共催でやってきた研究会である。昨年度は月二回独文で『抵抗と信従』新版を読んできたが、今年度は秋にドイツ・ボン・ヘッファー学会会長のテート教授を迎えたため、その前後はこの企画に研究会の力が集中された。その最後の会が三月二十日十一時～四時までセンターで行われる。来年度は再び定期的な研究会が再開される予定である。

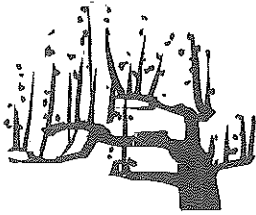
編集後記

富坂キリスト教センターの年間報告書第一号をお送りします。センターが具体的なプログラムを始めてからすでに二年が立ちますが、全てを新らしく始めなければならなかったため、しばらくは試行錯誤の状態を続けなければなりません。そこである程度まとまったプログラムが定着した段階で、みなさまにその内容を知っていただくこうと考えた次第です。個人的な感想になって恐縮ですが、主事に就任して以来、本当に大変な課題に直面してしまつたというのが実感です。しかし強い恩寵と信じ、二歩前進一歩後退でやっていきたいと思ひます。みなさまのご支援を心からお願ひ致します。

(鈴木)

富坂キリスト教センター建設計画について

富坂キリスト教センターでは、センター企画のプログラム構想とならんで、センター建設構想も立てています。一九七六年に富坂キリスト教センター理事會が設立されて以来、明治以来百年の歴史を持つ財団法人キリスト教イーストエイジ・ヤミッシュの土地をどの様に利用したらセンターの建設計画を実現していくことができるかは、常に理事會の関心事でした。しかし財団法人所有の土地にはセンター建設構想を立てる前に解決しなければならぬ様々な問題がありました。幸いセンターは法律顧問に今村嗣夫弁護士、建設顧問に岩井要・真建築設計事務所所長、会計顧問に石橋光朗・石橋税務会計事務所所長という強力な顧問陣を持つことがゆるぎを省き、現在この方面でも様々な努力をさせていただいております。そこでこの建設計画については次号でもう少しくわしくご報告できるものと幸いです。



富坂キリスト教センター学生寮のご案内

富坂キリスト教センターはドイツ東亜伝道會が長年運営していた学生寮（定員三十名）の管理運営を引き継ぎましたが建物の老朽化、センター建設の問題が出てきたため、この学生寮をしばらく閉鎖してまいりました。しかし諸般の事情から、キリスト教信仰に基づく共同生活を志向する小さな学生寮をとにかく発足させることになり、一九八四年十月からその準備を進めてまいりました。この学生寮は定員五名という小さなものですが、それだけに共同生活を充実したものにしたいけるものと期待しています。

キリスト教信仰に基づく共同生活と申しましても、センター側の規準に生活をあてはめていく、というおしつけ生活ではなく、入寮した学生同志でその共同生活内容を決定してキリスト教信仰に基づく共同生活を作り出していく寮であります。そのためには個人の生活が十分に尊重されなければなりません。また入寮の条件としては、キリスト者またはキリスト者となることを希望する男子学生で二年間在寮可能な方としました。地下鉄丸の内線後楽園下車徒歩十分または地下鉄三田線春日下車十分の交通の便も生活環境もきわめて良い場所です。各地の教会からのすいせん、留学生のすいせんなどを心からお待ちしております。

センター図書室について

富坂キリスト教センターでは、様々なプログラム構想と並行して、それらプログラム内容を豊かに実現させていく様々な施設についても構想をねっています。その一つにセンター図書室があります。現在東京だけでも各教団の神学部図書、大学図書館内の神学書など利用可能な多くの図書があると思います。しかし、それら教団関係図書室に、広く見わたしてみても一つ大きく欠けている部門があるように思います。それは、宣教と伝道の対象である日本の精神構造を歴史的に民族学的に文化的に深く知るための文献であります。センターでは小さな図書室の特徴を生かして、この部門の書籍を現在集中的にあつめています。図書室開室はまだ一年程先になると思いますが、その際にはみなさまのご利用を心からお待ちしております。

なお、この部門を中心に、みなさまから献本をしていただけたらと願っています。これまで元名古屋YWCA総幹事栗原佐代子さんから岩波書店版日本古典文学大系、九州大学教授横山晃一郎氏から宗教法制研究書等の献本がありました。本当にありがとうございます。

— 1985 年度ドイツ語 —

— 神学書及び会話研修コースのご案内 —

富坂キリスト教センターでは、ドイツ語神学書を読み、合わせて会話を学ぼうとされる牧師・神学生・教会関係者のために以下の様な研修コースをもうけています。ご参加をお待ちしております。

- ◇期 間 前期 1985年4月25日(木)～9月 (15回)
後期 10月～3月
- ◇時 間 毎週1回 木曜日 午後6:30～9:00
- ◇人 数 初級 10名まで(初級会話と初級講読)
中級 10名まで(中級会話と中級講読)
- ◇講 師 ドリス・グロース宣教師(東京望みの門・協力(女性)宣教師)
鈴木正三牧師(富坂キリスト教センター・研究主事)
- ◇場 所 富坂キリスト教センター集会室(地下鉄丸の内線後楽園下車徒歩10分)
- ◇費 用 前期 15,000円 後期 15,000円
(コピー、資料代、特別プログラム費等は別)
- ◇特別プログラム ドイツ神学の解説、ドイツ文学散歩、ドイツ映画鑑賞、ドイツの食事、クリスマス会などのプログラムを通して、ドイツ語を幅広く学びます。
- ◇申し込み 4月18日(木)までに、下記に電話でお申し込み下さい。

富坂キリスト教センター

〒112 東京都文京区小石川2-9-4 Tel (03) 812-3852

富坂キリスト教センター

— ゲストルームのご案内 —

- ◇富坂キリスト教センターでは、海外から日本の教会等を訪問される教会関係者のために、長期滞在可能なゲストルームを用意しております。
- ◇このゲストルームは、東京に用事で来られる各地の牧師諸先生、教会員の方々にも利用していただけるようになっております。
- ◇特に長期滞在の方々には、一週間につき一日、一ヶ月につき一週間の割引でご利用いただけるように便宜を計りました。
- ◇ゲストルームはホテルではありませんが掃除、洗濯、食事などご自分でやっていただける様に設備がととのえてあります。
- ◇ツインルーム(G 201)
洋式シャワートイレ、台所、洗濯機、ベッドルームの外 応接空間のある、全体で20畳位の客室
- ◇シングルルーム(G 301)
洋式シャワートイレ、台所、洗濯機、G 302と共用、8畳位の客室
- ◇シングルルーム(G 302)
洋式シャワートイレ、台所、洗濯機、G 301と共用、6畳位の客室
- ◇ゲストルーム予約その他くわしい事をお知りになりたい方は下記にご連絡下さい。
富坂キリスト教センター事務室
(03) 812-3852